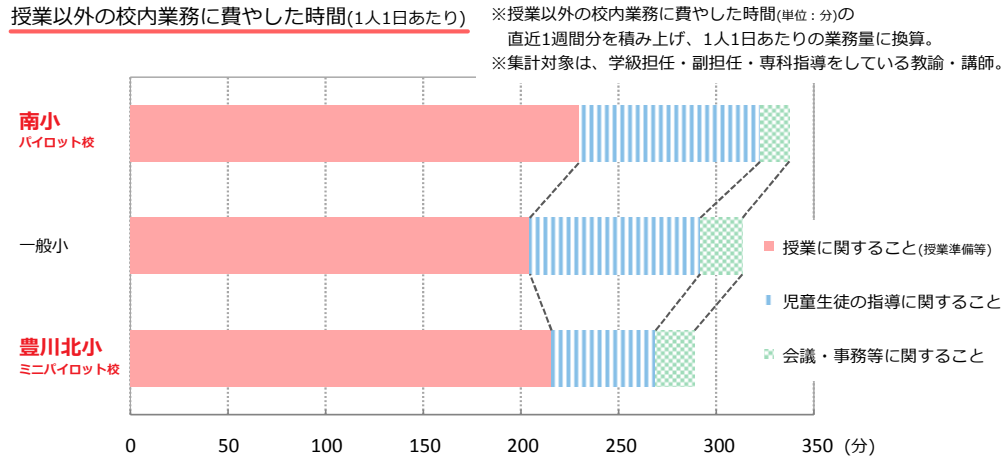


学校組織体制の再構築

進捗 ■パイロット校・ミニパイロット校と一般校の業務実態を把握・比較するため、11月に教職員の業務実績調査を行い、その結果を基に効果検証を実施しました。

教職員の業務実績調査の結果概要(抜粋)



- 成果**
- 南小では、ミドルリーダーを中心とした校内の情報共有体制が構築されたことや、事務支援員へ印刷業務・データ入力等を集約したことなどにより、会議・事務等に関する教員一人当たりの時間が一般校と比べて少ない。
 - 豊川北小では、専任化されたミドルリーダーが学校全体のコーディネーターとして機能し、特に児童への生活指導業務において問題の早期発見・対応がスムーズに行われ、問題行動の未然防止につながったことで、児童の指導に関する教員一人当たりの時間が一般校と比べて少ない。
 - 「箕面子どもステップアップ調査」の結果と併せて検証したところ、パイロット校においては、研究部長が中心となって授業力向上の取組を充実させたこと等により、学校全体の授業改善が進み、児童・生徒の学力向上につながっていることが分かった。

- 課題**
- 一方で、時間外勤務実績調査と併せて検証したところ、業務効率化により生み出された時間分を授業改善などの取組に充てたこと等により、むしろ一般校よりも業務時間の総量が増えてしまい、時間外労働の抑制にまで至らない学校もあった。

- 今後の取組**
- H30年度は教育の質を保ちつつ、学校全体の業務総量を減らしていくことを第一の課題とし、学校における働き方改革を推進していきます。
 - ミドルリーダーを中心として、具体的な業務改善(例えば行事や会議の精選、校務分掌の見直し、授業準備の効率化など)に重点的に取り組んでいくことにより、教職員の勤務時間の縮減や業務負担の軽減を図ります。

すべての児童生徒の学力の向上

進捗 ■習熟度別指導について、12月に実施した「箕面子どもステップアップ調査」の結果や過去の結果と前回までの議論を踏まえて、効果検証を実施しました。

習熟度別指導の効果検証

- H29年12月およびH28年12月実施のステップアップ調査の結果を比較し、算数または数学の偏差値が向上した児童生徒数の割合(以下、「向上率」)を基に検証を行った。

分析1 学級の分割方法毎の向上率

習熟度別指導における学級の分割方法の違いによる学習効果を検証するため、1学級2分割・2学級3分割・一斉授業(分割なし)それぞれの該当児童生徒の向上率を算出し、比較した。

分割方法	学力が向上した子どもの人数の割合	
	小学校	中学校
1学級2分割	41.7%	58.4%
2学級3分割	41.9%	実施校なし
一斉授業(分割なし)	42.2%	56.0%

- 結果：小学校**
- 児童全体の向上率を比較すると、1学級2分割と2学級3分割では大きな差は見られなかった。
 - しかしながら、一斉授業(分割なし)と習熟度別指導との対比を見ると、分割方法の違いに関わらず、一斉授業より習熟度別指導の向上率の方がやや低い結果となった。

- 結果：中学校**
- 一斉授業と比べ、1学級2分割の向上率の方が高い結果となった。(なお、H29年度に2学級3分割による習熟度別指導を実施している中学校は無い)

分析2 分割後のクラス毎の向上率

分析1の検証をさらに深めるため、分割後の習熟度別クラス毎の向上率を算出し、比較した。

なお、習熟度別クラスの呼称は学校により異なるが、便宜上、1学級2分割の場合は「応用・基礎」、2学級3分割の場合には「応用・標準・基礎」と表記を統一している。

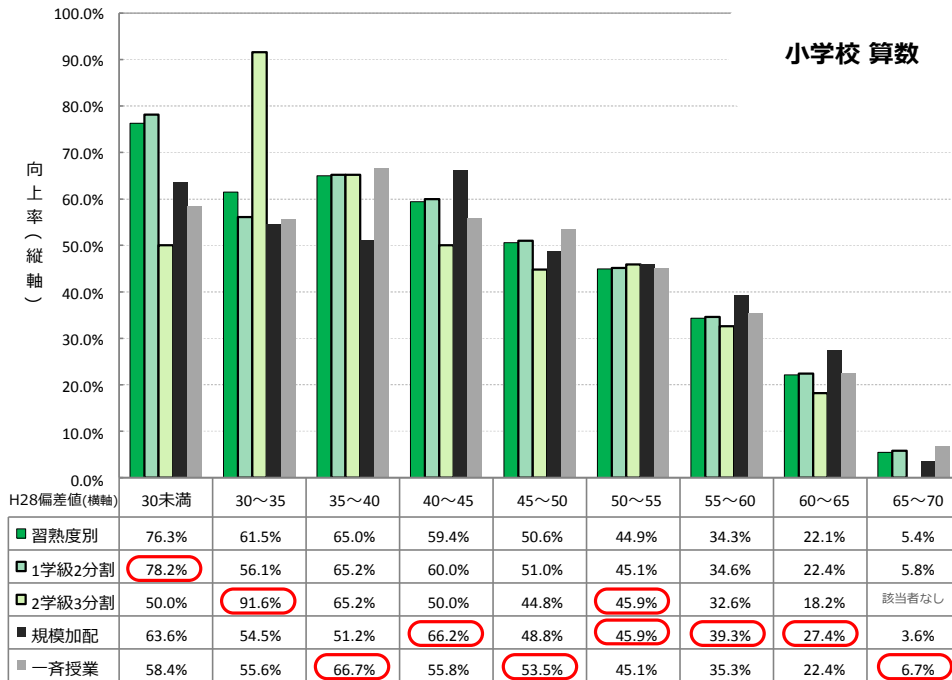
分割方法・クラス	学力が向上した子どもの人数の割合		
	小学校	中学校	
1学級2分割	応用	41.0%	62.3%
	基礎	43.1%	51.3%
2学級3分割	応用	39.0%	実施校なし
	標準	45.9%	
基礎	42.0%		
一斉授業	42.2%	56.0%	

- 結果：小学校**
- 応用クラス在籍児童の向上率は、1学級2分割・2学級3分割でも、標準クラスや基礎クラスの向上率に比べ低い結果となり、一斉授業と比べても低い結果となった。

- 結果：中学校**
- 応用クラス在籍生徒の向上率は、一斉授業と比べて高く、逆に基礎クラスについては向上率が低い結果となった。

▶ H28年度時点の学力や、H29年度に受けた授業の形態による向上率の違いを見るため、さらに追加検証を行った。

すべての児童生徒の学力の向上（つづき）



分析3 H29授業形態別×H28学力別の向上率

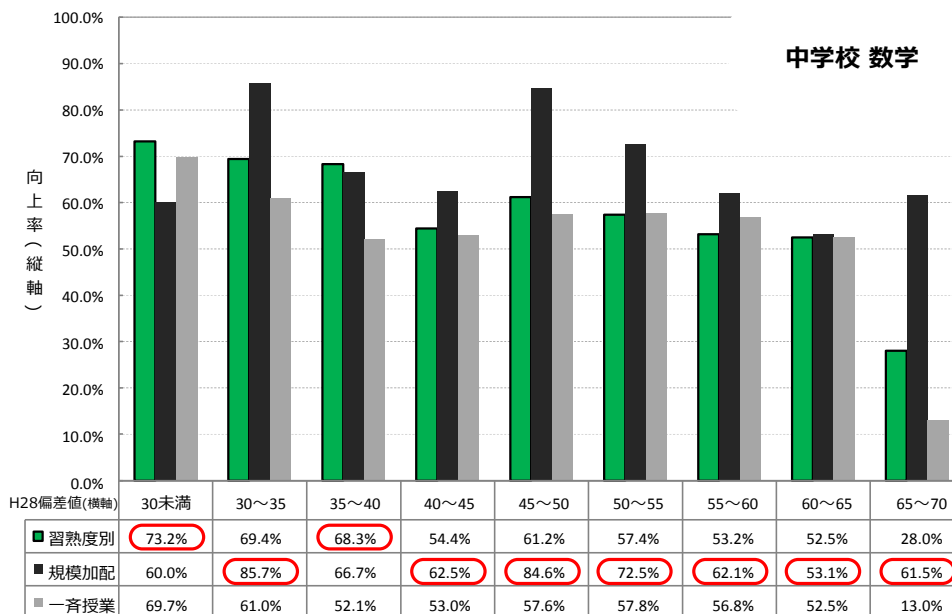
子どもが受けている授業形態と元々の学力によって、向上率にどのような違いが見られるのかを検証した。H29年度において、箕面市では習熟度別指導と一斉授業の他に、国の学級規模検証加配(以下、「規模加配」)を活用して少人数学級を増やし、きめ細かい指導を行っている。この規模加配も検証の比較対象とした。

結果：小・中

- 小・中学校共に、成績中・上位層においては、習熟度別指導より規模加配による少人数指導や一斉授業の方が、向上率が高くなる傾向となった。
- 逆に成績下位層においては、習熟度別指導の方が、規模加配や一斉授業より向上率が高くなる傾向となった。

補足

- さらに小3～中2までの学年で区切った分析を行ったが、学年毎で結果にバラツキがあり、有意な差や傾向は見られなかった。



今後の取組

- H30年度は同様にデータを蓄積することで、習熟度別指導の形態やクラスの人数などによる学習効果の検証を深め、学力向上に資する授業形態の要素や課題の整理を行っていきます。